

## 平成29年度 独創的研究助成費 実績報告書

平成30年3月30日

報告者	学科名	保健福祉学科	職名	講師	氏名	樟本 千里
研究課題	幼児の道徳性・規範意識を育むための要因—保育者の言動的働きかけからの検討—					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	樟本千里	保健福祉学科・講師	教育心理学	研究統括、調査の実施、調査の報告	
	分担者	岩立杏子	東京学芸大学・教授	幼児教育学	幼児教育政策からのアプローチ、調査報告	
研究実績の概要	<p>H27年度の地域貢献特別研究では、「知の拠点」である大学が、保育現場とともに園内外の研修や、保育実践者研究の援助を行い、保育所の研修力・研究力向上のプロセスを実証的に明らかにすることを通し、大学と地域の保育施設の共同的学びのモデルを構築することを目的とし、続く H28年度の地域貢献特別研究では、H27年度に構築した、研修力・研究力向上のプロセス及び場を用いて、異年齢活動が子どもの思いやりを育むのかについて、1年間の子どもの変化を追うことで明らかにした。本年度はその H28年度の研究成果について、岡山県内で開催される日本保育学会において保育者が実践研究の報告をし、実践研究を通して保育者と研究者が交流をする経験を持ってもらうとともに、H29年度の独創的研究として、H28年度の研究の中で注目した保育者の言葉がけに注目し観察と実験を行い、文脈の中に含まれる教育的な働きかけを探る計画であった。</p> <p>観察調査（県内私立保育所での観察10回の行事、県外国立附属幼稚園での観察1回通常保育）を行った。</p> <p>県内の保育所の観察を通して以下のようなことが見出された。</p> <p>1. <u>日々の活動からの繋がり・連続性</u>：</p> <p>行事会当日だけの活動だけではなく子どもたち（特に5歳児）が継続して活動している（活動に向けて準備をする期間があった）ことで、5歳児はほかにこにこ会において予測を持って、年下の子達と関わること、また活動に対して主体的に関わることができたのではないか。</p> <p>2. <u>日頃からの活動場面の共有</u>：</p> <p>5歳児が準備をしていることもあって、受け入れの当該クラスの保育者が5歳児に声をかけることで、思い出したり、期待されていることを知ったり、やる気に繋がったりしたのではないか。当該クラスの子どもたちも、年長児、年中児になじみを持ち、年齢によって期待を持って年上の子どもたちを待つことが出来たのではないか。</p>					

※ 次ページに続く

<p>研究実績 の概要</p>	<p>また、次のような課題が見出された。</p> <p>1. <u>4歳児の学びの保証</u>：  3学年以上で異年齢保育では、年長児である5歳児がリーダーシップをとることになる。そのような中で、4歳児は5歳児と比較的能力が近いために、リードする側にまわるのか、される側にまわるのかが明確にはならない。そのため、活動の中で浮いてしまう状況がたびたび観察された。4歳児の学習のねらいをどこに置くのか、学びをどのように保障していくのかについては今後の課題となる。</p> <p>2. <u>保育者のねらいと働きかけ</u>：  保育者の援助技術のひとつに「見守る」ということがある。子どもの主体性ということと一緒にすると、保育者からの援助、すなわち働きかけがあまり見られないということにつながっていく。活動中の言葉がけも、静止の言葉や、活動の方向性を直接示す言葉が多い一方で、子どもに考えさせるような言葉がけはあまり見いだせなかった。活動のねらいと保育者自身の行動との関係を明確にしていく必要がある。</p> <p>研究の課題  観察から得られたことをもとにして、子どもに面接調査を行う予定でいたが、3月末に予備調査を行うところまでしか進めることができなかった。予備調査の結果をもとに、本調査を行うことが今後の計画として残されている。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>&lt;昨年度の成果 地域貢献特別研究費&gt;  池田絹三枝・川井裕之・今田一二・榎本千里 (2017) 思いやりを育む異年齢保育の取り組み—異年齢活動を通じた年長児の学び— 日本保育学会第70回大会 川崎医療福祉大学  川井裕之・池田絹三枝・今田一二・榎本千里 (2017) 思いやりを育む異年齢保育の取り組み—クラスでの気持ちの共有を目的とした保育者の関わり— 日本保育学会第70回大会 川崎医療福祉大学</p> <p>&lt;今年度の成果&gt;  2018年日本教育心理学会総会（東京：慶応大学）、ポスター発表予定 原稿作成中</p>